

わんちゃん、ねこちゃんの健康について、獣医さんから
専門的にお話しいたします！

わんにゃの健康最前線

「知っていますか？ 前十字靭帯のこと」



京都中央動物病院
院長 獣医師

村田 裕史 先生

わんちゃんの後ろ足が痛そうだけど……

色々な疾患が含まれる可能性があります。比較的、一般的な問題として膝関節の「前十字靭帯」に起因した痛み＝跛行(はこう)であることがあります。

「跛行」とは正常に歩くことができない状態を指します。この「前十字靭帯」は負重したときに膝の関節の前方方向へのすべりを抑制するために働く靭帯であり、歩行にはなくてはならない機構となります。この前十字靭帯が加齢により弱くなってくる＝変性を生じて徐々に断裂していきます。このだんだんと断裂する過程でも痛みが生じますが、完全に断裂すると膝関節の不安定性が増し、関節軟骨や半月板などへのダメージとなることで、やがて膝関節に骨関節炎が生じます。

この加齢性の変性による前十字靭帯損傷のパターン以外に、臨床の現場でよく遭遇するのは小型犬で膝蓋骨内方脱臼を伴っているケースです。これは上記のように靭帯が変性することに加え、膝蓋骨が内方脱臼することにより膝関節に内旋方向の不安定性が加わることで原因です。そのストレスが引き金となって前十字靭帯が更なる損傷を受けるためです。

この後ろ足の痛そうな様子は整形外科疾患の可能性が非常に高いのですが、椎間板ヘルニアの症状である麻痺であったり、循環器疾患に関連した血栓症であることもあるため、まずは整形の問題であることを確認することが大切です。

診断の最初のステップは視診であり、わんちゃんの後ろ歩行(図1)を見ます。後肢が後肢か？ 右か左かを歩行を見ながら確認していきます。この跛行診断はかなり難しいことも事実です。最近ではスマートフォンで動画を記録するのもいい方法です。これにより、家や散歩での歩行がわかりますし、動画をスロー再生することにより問題となっている患肢がはっきりすることがあります。気になる歩行があれば動画での記録をしてみてください。



(図1)

次のステップは触診です。これにより膝に痛みがあるのか？膝関節の前方不安定性があるのか？膝蓋骨内方脱臼が存在するか？などを確認していきます。

そして膝に問題があると確認できたらX線検査(図2)へと進みます。このX線検査では骨折や脱臼などの問題の有無や膝関節に関節液の貯留、骨棘、骨関節炎などの所見があるのか？などを確認していきます。実はX線検査では前十字靭帯や関節軟骨、半月板は写りません。このため診断はX線検査だけでなく総合的に判断していくことが非常に重要になります。



(図2)

追加の検査で、近年はエコー検査(図3)の有用性がだんだんと高まってきております。この検査にも

麻酔は必要ありません。エコー検査は先ほどのX線検査と異なり、前十字靭帯や半月板、関節軟骨の状態を確認することができます。



(図3)

この疾患は基本的には外科治療が必要とされており、もちろん、外科手術には全身麻酔が必要となるため全身麻酔を行うことが可能なコンディショニングか、心臓やその他の問題がないかは術前に検査しておきたいところです。また、外科手術の方法としては①関節内手術法、②関節外手術法、③矯正骨切り術など様々な方法があり、時には組合せて実施されることもあります。

次に、保存療法としては、安静や体重制限、痛み止めの薬、関節用サプリメントなどが使用されています。これだけでは十分にコントロールできないことが多いですが、外科治療と同時にこれらを行うことも非常に

多く、症状の緩和に有効です。

この疾患を初期に診断し、積極的に外科治療を行うと予後も良好なケースが多いですが、逆に診断が遅れ、骨関節炎が重度である場合、内側半月板が損傷を受けている場合などは炎症が持続することにより跛行が続くケースも存在します。しかし、そのような末期の症例で重度な関節炎がある場合であっても外科により膝が安定すると歩行が改善していきます。ですので、進行した前十字靭帯疾患であっても外科を検討することは有益です。

「最近、後ろ足が少し痛そうだけど、元気でご飯も食べるし、歳だし仕方がないよね」とこのような会話を診察室で聞くことも少なくありません。しかし、これはもしかすると前十字靭帯疾患が原因かもしれせん。大切なポイントとして前十字靭帯疾患は治療が可能であり、多くの場合、足の痛みが軽減する疾患です。少しでも心配なことがあれば、ぜひ獣医さんに相談してみてくださいね。

〈お問い合わせ〉

京都中央動物病院

電話・FAX

075-821-1020

京都市下京区柿本町582-3
9:00~20:00